

「心頭滅却すれば火もまた涼し」さりながら 猛暑まだ一月

涼しくなる日まで後何日と過ごしてみても・・・？

お盆過ぎてな お暑さを去らず。 抹香臭さもまだ消え去らぬ・・・

最低気温が28度という日が続いています。

「心頭滅却すれば火もまた涼し」なんて文句を、織田信長比叡山焼き討ちの時に、お寺の門に掲げて焼け死んだお坊さんがいるそうです。

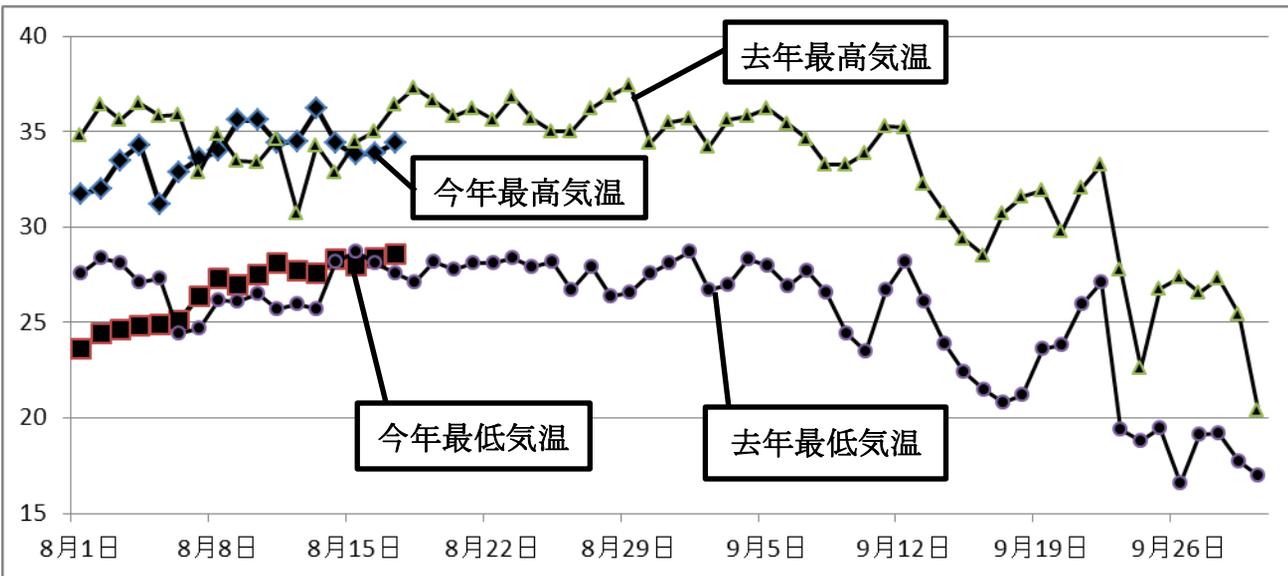
我ら凡人に出来るのは、「もう幾つ寝るとお正月」式に「暑さ寒さも彼岸まで」という秋分(9月23日)を、あと何日と数えて、待ち焦がれるくらい。

もつとも、まだ1ヶ月も先なので、数えるのもむなしのような気もします。エッ、「数えても数えなくても季節の移り変わりは天然自然に来るもの、数えること自体がむなしいのである。日々懸命に生きていれば、季節至り、自ずと分かる秋の訪れ、それを感じる時が、喜びとなる。9月23日が、たまたま夏日になったらどうする、落胆も大きいだろう」ですって、イヤ、誠にもつとも様です。

もつとも、人というのは、「目安を付ける」事が必要なき生き物ではあるようです。生活保護に行くにしても、「65歳になったら」「〇月になったら」という声を聞くことがあります。ある目途をたてて、生活するというのは、人の特性のように思えます。中々、もくろみ通りにならないのも人の常のようではありますが。

相当に体の調子が悪くなるか、知人が死ぬか、何か切っ掛けがないと、生活を変える踏ん切りがつかない人も多いように思えます。

「夜間宿所と炊き出しに、安住するつもりは なくても 出来ぬ理由が 山とあり」「懸命に 身過ぎする身を なぜかくに 生保生保と 責め立てる」「生保草鞋の道なれど 吾踏み越えん 地獄針山」 惰性居士後付和讃



生活保護 制度の陰で一連載3回目ー 反ビジネス 大阪の戦い (朝日新聞・夕刊より)

無料低額宿泊所への依存を強める首都圏の自治体とは対照的に、業者の排除を進めるのが大阪市だ。

1日朝。市内のある区役所の福祉窓口は、生活保護費を受け取りに来た人たちで混雑していた。少し離れて視線を送る2人の市職員。悪質業者を取り締まる特命チームのメンバーだ。

2008年秋のリーマン・ショックで、生活保護を申請する人が再び急増。首都圏の自治体はますます業者に頼ったが、大阪市はこれとは逆に特命チームをつくって規制を強めた。

区役所近くに不審な車がとまればナンバーを控え、業者らしい男を見かければ携帯メールで「あの男、前にも見たことがある」と連絡をとりあう。生活保護費を徴収している怪しい人物が現れれば、府警出身の職員の手も借りて、刑事のように尾行や張り込みをして正体を突き止める。

大型の宿泊所に、自治体から紹介された生活保護受給者をまとめて住ませる関東流とは違い、大阪では業者が街中で声をかけた路上生活者らにマンションの1室をまた貸しして、個別に管理するのが主流だ。

今年5月から6月にかけて、生活保護受給者に無許可で賃貸マンションを仲介、実際より高額を保証金を申請させたなどとして、NPO法人の理事らが宅地建物取引業法違反や詐欺などの疑いで逮捕された。

特命チームが昨年6月にこのNPOの行動を聞きつけ、市内の24区役所に情報を照会。聞き込みのほか、登記簿や生活保護受給者との不動産契約書などから人と金の流れを解明し、府警への告訴につなげた。

東京の業者が商業ビルを改装して宿泊所を開こうとした際には、現地調査のうへ「住居の体をなしていない」と届け出を退け、進出を断念させた。

特命チームの職員は、「保護費のほとんどは税金だ。1円たりとも業者に渡したくない」と話す。

業者の取り締まりだけではない。大阪市は社会福祉法人と提携して、生活保護申請に訪れた路上生活者らを2週間ほど法人の施設に入れ、その間にアパートを見つけて入居させる制度もつくった。10年4月の制度開始以後、千人以上の住まいを確保した。

取り組みの背景には、生活保護を受ける人たちの人権擁護もさることながら、保護費の負担を減らしたい市長らの強い意向がある。

大阪市の生活保護費は1991年度から増え続け、11年度の当初予算では2916億円。総額の17%弱を占め、全国の市町村で最高額だ。ただ、5兆円を超える負債を少しでも減らしたい市の生活保護への姿勢には、懸念の声も出る。(2011年8月17日 朝日新聞・大阪・夕刊)